

Title	分析的宗教哲学の形成
Sub Title	The rise of analytic philosophy of religion
Author	間瀬, 啓允(Mase, Hiromasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1966
Jtitle	哲學 No.48 (1966. 3) ,p.171- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000048-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

分析的宗教哲学の形成

間 瀬 啓 允

英 書 紹 介

Willem F. Zuurdeeg, *An Analytical Philosophy of Religion*, 1959

Alasdair C. MacIntyre, *Difficulties in Christian Belief*, 1959

John Hick, *Faith and the Philosophers* (Ed.), 1964

宗教言語の哲学的分析——それは昨年度提出のわたしの修士論文の論題であったが、この種の議論はここ数年来、特に英米の宗教哲学の分野で活発に行われているものである。いつも「宗教哲学とは何か」の間ではじまるこの種のテキストには、最近では、「宗教言語」乃至「宗教言語の諸問題」と題する一章が新たに書き添えられるようになった。例えば、

Goddes MacGregor, *Introduction to Religious Philosophy*, 1960

John Hick, *Philosophy of Religion*, 1963

等のテキストはその好例である。

宗教言語の哲学的分析——それはヴィットゲンシュタインの影響下にあった哲学者たちが、論理実証主義の再検討としてはじめたもので、論理実証主義が宗教命題を無意味な命題として退けようとしたのに対し、この哲学者たちは、宗教言語の基本的機能に着目することによって宗教に特有な論理の発見の道をたどろうとした。この種の論議は、最初、

New Essays in Philosophical Theology ed. by Antony Flew and Alasdair MacIntyre, 1955

にあらわれたが、その後、

Faith and Logic: Oxford Essays in Philosophical Theology ed. by Basil Mitchell, 1957

Metaphysical Beliefs ed. by Alasdair MacIntyre, 1957

The Existence of God ed. by John Hick, 1963

Faith and the Philosophers ed. by John Hick, 1964

等において活発な議論の展開をみせている。沢田允茂教授の「科学的思考のまえて宗教はどのような立場をもちうるか」(「現代における哲学と論理」岩波39年)、及び、「科学の仕事と宗教の仕事」(「科学時代の哲学」2, 培風館39年)はいずれもこの種の議論に参加するものとして見落してはならない。

オックスフォードを中心とするこれら現今の分析哲学者たちは、オックスフォード学派乃至日常言語学派と呼ばれ、その立場はアームソンの「二つのスローガン」にまとめられる。即ち、

1. 意味を問わないで用法を問え。
2. あらゆる陳述にはそれみずからの論理がある。

この立場は、一方では、哲学が人間の知恵を披瀝するものではなくて人間の用いねばならぬあらゆる説話形式を分析するものであることを教え、他方では、そのような用法を分析することによってその説話に特有な論理の発見に向うことが大切であることを教えた。かくて、分析哲学者のみならず哲学的神学者をもして、宗教には宗教特有の論理があることを悟らせ、かかる論理の発見の道に向わしめたのである。ここで注目すべきは、その結果、哲学と神学との間に新たな交通が開けたことである。それまで哲学と神学の関係といえは、理性が啓示の説くところの神の受肉のロゴスによって非真理の契機、即ち、非寛容と排他性の要求、従って交通不能を見出し、結局、両者は対峙関係におかれたままであったが、こうした新たな哲学的主張のもとで両者に共通の地平が開かれたのである。今日、世界の哲学者、神学者が共に注意を注いでいるのは、日常言語学派が果たしたこ

うした努力の成果に対してである。

元来、宗教哲学は専ら、キリスト教信仰に立った宗教の弁証論であると思われていたが、今日では、宗教言語の分析を受持つものとして、それ故、言語分析としての哲学に属するものとして、積極的に理解されるようになってきている。例えば、この点を明確に打ち出しているものに、

Willem F. Zuurdeeg, *An Analytical Philosophy of Religion*, 1959
がある、

現代哲学の方法が言語分析である点に注目して、この著者は、宗教言語を分析するものが宗教哲学であって、それ故、宗教哲学は哲学の部門、哲学一般に属するものであることを力説している。

「キリスト教信仰の特殊形式を弁護することが宗教哲学の課題ではないし、或いはそのことの故に、いかなる宗教的確信のそれをも弁護するものでないという考えが、この方法には含意されている。

(1) 宗教哲学は神学部門でもなければ、組織神学を用意するものでもない。

(2) 科学、芸術、哲学の『諸真理』を考察することにより、それ自身に余りに深入りしすぎる傾向をもった信仰を横に拡げることが、宗教哲学の課題ではない。」(同書, p. 14)

また、哲学乃至宗教哲学に寄せられる伝統的な考え方、即ち、それは魂が求める人生の道案内をすべきものである、という考え方に反駁して、次のように言う。

「人々はその信仰、その道徳、その世界観、その小説、演劇、詩歌によって道案内をすべきであって、その哲学によってすべきではない。哲学および宗教哲学に対する伝統的な考え方の拒絶は、それ故、次のような主張によって、即ち、人生の意味、神の本性についての問答は完全に有意味ではあるが、それは哲学によって分析すべき意味の領域に属するのであって、哲学そのものに属するのではない、という主張によって

補足されねばならぬ。」(同書, pp. 14-15)

この著者によれば、分析哲学が持つアプローチの仕方はただ分析することが出来るだけであって、弁証も、評価も、診断も、証言も、説得も、確信も、説教もつけ加えることが出来ない。従って、宗教を哲学的に分析するという仕事は、まだオックスフォードのキリスト教哲学者も果していない。何故なら、分析哲学のチャレンジに対して、彼らは新たな哲学することによるキリスト教の弁証をもってレスポンスしているからである。この著者がいう言葉の意味での「分析的宗教哲学」は、それ故、この種の試みとしては彼のものが最初であるといわねばならない。ただし、分析哲学が持つアプローチの仕方を、「ただ単に分析することが出来るのみである。」(同書, p. 16) とするこの著者の主張には、多分に批判の余地があるように思う。成程、哲学はメタ科学の立場からある議論や推論のパターンに興味を寄せる。そして、できるだけ客観的にこれをながめ、記述しようとする。しかし、ただ単に記述することだけが哲学の受持つ仕事だろうか。オックスフォードの哲学者たちのいうように、診断し、評価する仕事もつけ加えられていいのではないだろうか。でなければ、分析哲学は積極的な仕事に欠けるという批評を甘んじて受けねばならないだろう。ともあれ、ここには「分析」に対する英米間の態度の相違というものがみられて興味深い。

「分析的宗教哲学」は、この著者がシカゴのマッコミック神学校在職中に書かれたもので、神学書にもたびたび紹介され、神学者と哲学者の討論を始めさせるという大変意義深い貢献を果たした。残念なことに、この著者はつい先頃亡くなった。

哲学はメタ・サイエンスであって、問われている問を問う。そして、そこに含意されているものを明瞭化する仕事を受持つ。しかもその仕方は、ただ単に記述するばかりでなく、評価もしなければならない、と主張した

ものに

Alasdair C. MacIntyre, *Difficulties in Christian Belief*, 1959

がある。

この著者は、オックスフォードのキリスト教哲学者で、ラジオ番組を通して、広く一般の英国人の中で知られている。彼によれば、物理学、神学、文芸批評の求め、答えんとしている間は、「第一次的問」(first-order questions)であり、この問が如何なる問であるかを求める哲学の問は、「第二次的問」(second-order questions)である。つまり、哲学的問は、問についての問であり、哲学は「第二次的問」に関わるのである。実際、多くの哲学者の関心は、物理学者や神学者たちの記述に対してであり、彼らの議論、彼らの推論のパターンを哲学者は分析し、評価する。何故なら、推論にはよい推論とわるい推論があり、議論には、議論の適切な使用と不適切な使用があるからである。従って、第一次的問と答について、第二次的な仕方では反省することによって論理の一貫性乃至無矛盾性を吟味せんとするものが哲学なのである(同書, pp. 11-14)。

「キリスト教信仰の諸困難」の始めの部分で、著者はその著述目的の一つである「哲学とは何か」について、このように明確に答えてから、次にもう一つの別の目的、即ち、「哲学的議論の技巧が、重要な宗教的諸問題の討論にはどのように適用できるか」にすすむ。そこでは伝統的に、キリスト教信仰には困難な諸問題のうちの一つ、「悪の問題」がとりあげられる。

悪の問題は、それが哲学的問としてみられる時には、次の三つの陳述が矛盾を起してはいないかどうか、の問題である。

- (1) 神は全能である。
- (2) 神は全く善である。
- (3) この世には悪が生ずる。(同書, pp. 16-17)

ミルやジェームズは、悪の問題に関する限り、信仰の諸命題は矛盾を起

していると考えた。そこで(1)の命題を放棄することによって、(2)と(3)の命題を調停しようとした。即ち、神は全く善でありながら、能力においては悪からの制限を受けており、従って、悪とのたえまない闘争において、神は人間を協力者として持つ、というのである。しかし、キリスト教信仰にとっては、(1)(2)(3)の諸命題はいずれも放棄することのできない信仰に不可欠の諸要素であって、キリスト者はこれら三つの諸命題に対してコミットメントを持っているのである。とすれば、キリスト教信仰は矛盾を含んだ信仰なのだろうか。

悪の問題は、既に、

New Essays in Philosophical Theology ed. by Antony Flew and Alasdair MacIntyre, 1955

において、「神学命題は偽とされないか」——Theology and Falsification——を論題とする大学討論において、活発な論議を展開させたが、そこでの議論は、悪の諸事実が神信仰と一貫性を持たぬといえ、神信仰は偽である (false) という有力な根拠を与えてしまうことになるし、逆に、一貫性を持つといえ、神信仰は偽とされない (unfalsifiable), 従って、有意味な命題とされないという有力な根拠を与えてしまうことになるという、いずれにしても、神信仰の諸命題を信じる者には抜け出せない論理的ワナを用意するものであった。そこでこのワナを如何に解消するかが、この議論に残された課題であった。

悪の問題に対する可能な解決策は、この著書によれば、次の二つの要求を満たすことにある。即ち、(1)悪は悪であって、善なる神の意志と闘争している。(2)それにもかかわらず、悪の生起はかかる神の存在せぬことを示すものでない、という二つの要求である (同書, p. 32)。この議論の展開には、神を目的論的に論ずる仕方が退けられて、アウグスティヌスが援用される。というのは、目的論的証明がいうところの神は、悪の問題の故に、まさにその全能、その善が信じるに足らぬものとされるような神であ

るのに反して、アウグスティヌスは、諸悪に抗して道徳的達成が可能な、自由な人間の創造を意志したところの神をいっているからである。

「そこにおいて闘争がいとまれ、遂には克服さるべき諸悪が存在する世界を創造しないでは、神は、道徳的達成が可能な、自由な存在者を創造することが出来なかった。」(同書, p. 36)

人間が自分の欲する通りに行為できるように、神はその全能を制限されたのであり、この限りでは諸悪は神に責任がない。従って、神は全能であり、全く善であって、同時に諸悪が生じても矛盾はないのである。つまり、

- (1) 神は全能である。
- (2) 神は全く善である。
- (3) 悪なるものは何一つ生じない。

において、(1)と(2)とからはけっして(3)は出てこない。従って、「この世には悪が生ずる」という肯定命題を(1)と(2)と一緒に並べても、矛盾を起すものではないということである。これを記号であらわせば、

$[p \cdot q] \supset p$

であるか、或いは、

$[p \cdot q] \supset q$

であって、

$[p \cdot q] \supset r$

ということにはならない、ということである。しかし、これで「悪の問題」が片づいたのだろうか。何故、かくも多くの悪がこの世には存在するのだろうか。何故、かくも多くの苦しみがこの世には存続するのだろうか。悪の認識論的起原については、同書は不問のままに終らせている。それは真正の神秘に属するからであるかも知れぬ。ただし、「悪の問題」がクレド一の真只中で、矛盾であるように思われたままで残されているならば、そのような非合理主義には我慢がならぬ。現代の知的合理主義のモチーフに

導かれる者には、「悪の問題」が、このように現代哲学の技巧による新たな仕方で扱われることに大賛成である。この書はそういう新たな試みを示すものとして、大いに評価されるべきであろう。なお、この種の新たな研究としては、

Nelson Pike, *God and Evil*, 1964

がある。

宗教言語の分析を課題として、分析哲学が開いた新たな地平における哲学と神学の交通は、

Faith and the Philosophers, ed. by John Hick, 1964

において、前進した歩みを認めることができる。

オックスフォード出身のキリスト教哲学者、ジョン・ヒックは、現在プリンストン神学校で宗教哲学を講じている人であるが、彼の編纂したこの書は、哲学者と神学者の学術討論——プリンストン神学校創立150年記念行事の一環として1962年12月開かれた——を報告している。最初のページにこの討論に参加した学者のリストが載っているが、これを見ると、オックスフォード、ミシガン、イエール、プリンストンその他の諸大学及び諸神学校から五十余名の現代の有力な哲学者、神学者を集めたことがよく分る。哲学者は、その主張が有神論的、懐疑論的のいずれにせよ、その大半が現代の分析哲学の立場に立つものであり、神学者は、種々の教派を代表するプロテスタントである。しかし、その中に二人のイエスイットの学者が含まれていることに注意したい。恐らく、ここにもエキュメニカル・プログラムが用意されていたのに違いない。

キリスト教信仰と哲学的批判の出合いは、このように大きな規模で、しかも、高度な学術討論のかたちで行われたのは、これが最初であろう。討論は卒直で、友好的、宗教哲学に重要な諸問題の明晰化に大変協力的であったというから、この出合いは誠に画期的であったといわねばならない。

先に紹介したマッキンタイア、ズールデーグも共にこの討論に参加している。なお、この書の編纂者、ヒックはカンファレンス・チェアマンであった。

討論には四大テーマがかかけられた。

- (1) 宗教的経験とその諸問題
- (2) 宗教的信仰の心理学的説明
- (3) 人は今日信仰者でありうるか
- (4) 神学における非合理主義

各テーマには、よく準備された論文が寄せられ、これに基づいた討論が次いでなされた。本書はその各論文と討論を収めている。

第一のテーマについては、オックスフォードの論理学者、プライス (H. H. Price) が “Faith and Belief” と題する論文を寄せて、討論の資料を与えている。彼は、日常の信仰者が日常の言葉で表現する素朴な信仰の有様、即ち、神を信じないではいられないという belief-state を明晰化せんと試みる。その仕方は、人間の「内面生活」(inner life) を積極的に認めることによって、その内面生活の場で、神が求められ、神が見いだされる、とするものである。神を求め、神を見いだすところの日常の信仰においては、有神論的諸命題の瞑想がまず最初にあって、次に瞑想したものを内面的行為に移すことにより、そこでいわれているものとの人格関係に入る、というプロセスがある。聖者とか、神秘家の信仰はいざ知らず、日常人の日常的宗教経験にはこの belief ‘that’ と faith in God との関係が、‘seeking’ God と finding him との関係に呼応している。そしてその途上で生じたものが宗教的経験であって、この経験がはじめに仮説でしかなかった信仰の諸命題を検証するのである。かくて、「経験が決定する」という経験主義者の主張は、宗教の場合にもあてはまる、というのである (同書, p. 24)。しかし、宗教経験が「内面生活」のものであり、それ故、宗教言語は記述的でなく、呼びかけのもの、従って、「我一汝」関係以外

のものをよせつけぬというのであれば、かかる内省的、主観的宗教哲学の主張から一体何が本当にいわれているのだろうか。宗教が内面生活の出来事であるとするプライスの最初の出発点から、客観的明証を求める哲学はつまづく。しかし、内面生活をあらわす宗教言語が一体どのような用法で用いられているかに討論が向けられて、そこでは、例えば、言語の‘performative’ use や、culcation からの類比が論じられる(同書, pp. 42-47)。

第二のテーマについては、ミシガン大学のアルストン(William Alston)が「精神分析学説と有神論的信仰」と題した論文を提出している。この論文は、性理論に基づいたフロイトの思弁が自然界の諸要因をもって神信仰を説明せんとした点に注目して、はじめに、説明の適切とはどういうことかを論じ、次に、自然界の諸要因をもって信仰を説明してしまえば、その信仰はもう信じるに足りぬ信仰であるといえるかどうか、を論じている。

神信仰が無意識的闘争の緩和のために仕組まれた投射からはじまったとするフロイトの思弁には、科学的に注目すべき明証性は何一つない(同書, p. 76)。退行と投射という人間が持つ心理的メカニズムを、信仰の説明にまで思弁的に拡張したまでのことである(同書, p. 77)。また、フロイト学説は、信仰を生ぜしめるに足る十分な諸条件を明らかにしてはいない(同書, pp. 79-80)。信仰に対していわれる理由と原因とは混同されてはならない(同書, pp. 81-82)、等々の諸点が指摘される。

神信仰を自然的諸要因をもって説明し、その真偽を検証せんとする試みが可能であるかどうかは、ここでの討論に残された課題であった。

第三のテーマについては、マッキンタイア(既出)の論文、「宗教を理解することと信じることは共存できるか」が討論の発題とされた。ここでは懐疑論者と信仰者との対話が、宗教についてはますます困難になってゆく事態をとりあげて、何故だろうか、と問う。

宗教、ここではキリスト教は、その諸概念において内的統一を欠く。例えば、神の全能と悪、神の予定と人間の自由意志等の諸問題は、それ故、中世から今日に至るまで熱心な議論の中心である。ただし、中世ではこのような知的諸問題の困難さ (difficulties) が信じないことの理由とはされなかったのに対して、現代ではその困難さがキリスト教破棄の十分な決定的な理由にまでされているという点が、大きな相違である。そこで、「宗教には宗教特有の論理がある」といって酌量を求め、或いは宗教に論理的反駁はあたっていない、と主張するのは、成程、一つの立場ではあっても、対話についていえば、それは「空虚」という価を払ってのことではない (同書, pp. 127-130)。

一般に、懐疑論者と信仰者の間に相互理解が付き難いのは、共通概念を共有することができないでいるからである。とすれば、両者による宗教的諸概念の共通理解は、「必要であって同時に不可能」(同書, p. 116) という深刻なディレンマに陥る。このディレンマはどうしたら解けるだろうか。

一つの手懸りは、人類学者乃至社会学者が採る方法をみることである。彼らは原始社会のマナとかタブーについて、原始人と共通概念を共有してはいなくても種々の方法によって理解しようとしているからである。ここに問題の著しい類比がある (同書, p. 117)。

人類学者がとる立場は、(1) 原始的思惟は前論理的であるとする Levy-Bruhl の立場。(2) 原始的思惟はそれがもつ言葉によって知られるとする Prof. E. E. Evans-Pritchard の立場。(3) 原始的思惟は儀式的行為に代行されているから、それは研究者の言葉によってはじめて意味をもつとする Dr. E. R. Leach の立場、等がある。しかし、このいずれの立場をとるにしても、知的理解の標準をどこに求めたらよいかについてはなお困難な問題を残したままである。その限りでは、はじめのディレンマを解こうとした意図は、かえって別のもの一つの新たなディレンマをうみ出してしまっている (同書, pp. 117-125)。

懐疑論者と信仰者との平行は、結局この知的理解の標準の差異ということである。宗教について、一方は知的に理解できるものが他方は理解できないというのであれば、ここでの問題はコンテキストの問題である。

「キリスト教が懐疑論的反対に傷つきやすいからではなくて、且つてはそれを理解しやすいものにしてきたソーシャル・コンテキストを今では失くしてしまっている信仰形式としてのキリスト教にそれ独自の不死身があるから、もしわたしが正しければ、キリスト教を理解することとそれを信じることは共存できないと思う。」(同書, p. 132).

マッキンタイアのこの結論に対しては、カトリック哲学者の烈しい反論があって、討論は活発につづけられる。

最後のテーマについては、エール大学の名誉教授、ブランシャード (Brand Blanshard) が、「カール・バルトに関する批判的考察」と題して遠慮のないバルト批判を寄せたので、これまた烈しい討論が展開された。

バルトは、宗教知が日常的意味の知識とは違って、理性による批判にも、または、擁護にも絶対に従わないとする点で、テルチュリアン、パスカル、キルケゴール、マンセルの線上を行く。宗教知が、フロイト、フォイエルバッハによって欲求の想像的充足とみなされたり、デューイによってプラグマティックに理解されたり、ヘーゲルによって合理化されたり、或いはシュライエルマッヘル、リッチェル等によって感情の事柄であるといわれたりしたのに反して、彼は、神が「全くの他者」であり、本性上、われわれとは非連続のものであって、それ故、われわれの思惟には閉ざされたもの、自然的諸能力によっては絶対に知られるものではないことを主張した。しかし、「全くの他者」であって、本性上、われわれとは非連続であるような神を、われわれはどうして知ることができるだろうか。

神の啓示は、彼によれば、人間には認めることのできないものであり、ただ測り知れぬ神の恵みの故に、時として人間生活の中に下り給う神聖の

なせるわざによって、即ち、信仰によって知られるのみである。そして、知られたものは、もしそれについて語ろうとすれば、単的に「神ご自身、神のみ」であるといわねばならぬ。なぜなら、真の啓示が生じたとき、「その前にあらゆる言葉は制せられ。われわれは神にまみゆる時、ただ拝し得るのみ。」だからである(同書, pp. 166-168)。このような「啓示知」は、バルトによれば、究極であって理性の検討を許さないのである。そこでは「理性の基準は妥当しない。」「理性は降伏しうるのみ。」である(同書, pp. 174-177)。

バルトが好んでとる方法は議論に訴えるのではなくて、絶対的権威に直接訴える方法である。彼はカルビンの言葉を引用する。

'omnis recta cognitio Dei ab oboedientia nascitur'

この原理の適用は、しかしながら、理性をもって科学することに対する非難であり、科学と科学的方法とを否定するものにほかならない(同書, pp. 193-196)。しかも、ここで最も皮相なのは、彼が退けようとしている理性が彼自身、神学することにおいて用いているところの理性である、ということである。ここにバルトに対する哲学的不満がある。この不満に駆られて、ブランシャードはバルトの非合理主義を徹底的にあばく。「しかしそれがバルトか」(プリンストン神学校のドーウェイ教授が提出した反論)はバルトに対する哲学者と神学者の視点の相違を示す。ここでは(1)啓示に関するバルトの見解が、実際あらゆる合理的活動を放棄するようバルトに要求しているかどうか。(2)理性と啓示の間にバルトが張ったと思われている「分離の壁」を、バルトはいこじに渡っているかどうか。(3)バルトは実際に神学者として、哲学的知性の犠牲を要求しているかどうか、の諸点が、神学者と哲学者の討論に残された課題であり(同書, p. 204)、多彩な論議が展開されている。